

理学部附属 植物園のいきものたち

第6回

なかなかすっきり晴れなかった今年の10月ですが、その短い晴れ間に植物園で出会った植物を紹介します。



● 写真上はウバユリ 英名 *Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino、ユリ科。

林内の木陰に生育する多年草です。写真は未熟な状態の果実で、中では一つの果実あたり600個以上ともいわれるたくさんの種子が育っています。この植物は、春先、林の木々に葉がない時期には葉を広げて光合成をしています。木々が葉を開き林内が暗くなる開花の頃には、しばしば葉が傷んだり落ちたりしています。その様子から、「葉がない→歯がない→姥(うば)」と名付けられたそうです。しかし、実際には緑の葉が残る場合も多く、どんな姥を想像していたのか、と議論の余地があります。ウバユリが満開になると梅雨明けだといわれますが、その頃には茎の高さが1 mにもなります。茎が風に揺れたとき、周囲に薄い膜状の翼をもった種子が果実から飛び出し、滑空して散布(ばらまき)をするのですが、実際のところ、かなり強い風が吹かないと茎はびくともしないようです。



● 写真下はチャ 英名 *Camellia sinensis* (L.) O.Kuntze、ツバキ科。

飲み物としてとてもなじみの深いチャ(茶)ですが、原産地は中国西南部です。平安時代初期には入唐した僧侶らによって日本へもたらされていますが、広く栽培されるようになったのは1191年に僧侶栄西が宋から九州の平戸島に持ち帰ってからのことです。日本でお茶といえば緑茶であるのに、褐色のことを「茶色」というのはそれが茶渋の色に由来するからです。

(撮影・解説: 今村彰生)